

# ぱれっとスタッフによる 福祉用語解説

渋谷区基幹相談支援センター主催の研修『本人の意思決定を重視した支援のあり方を考えよう』に参加して学んだ内容をまとめました。

## ●意思決定支援とは

自分の意思を決定するのが難しい障がいのある人が、日常生活や社会生活に関し自分の望む生活を送る事ができるように、できる限り本人が自分で決められるように支援することです。

障がいのある人が人として当たり前人生の主人公として生活を送る上では、意思決定の重要性が十分に認識される必要があります。毎日の繰り返しの中で、自分の事を自分で決める経験を積み上げることが自己信頼につながり、さらに意思決定する意識を高めていきます。

どんなに障がいの重い人でも、周囲(家族、支援者等)の配慮により意思決定はできるというのが基本的な考えです。しかし、もし支援を尽くしても本人の意思や選好の推定が困難な場合には、最後の手段として本人にとって最善の利益を検討するために事業者の職員が行なう支援の行為(代理代行決定)及び仕組みも含め意思決定支援といえます。

意思決定には、本人が【意思表示】をする事が必要で、まずはその元となる【意思形成】ができるような支援を目指していきます。

## 意思決定支援を構成する要素

- ①わかりやすい情報提供(絵や写真等)
- ②意思表示支援(安心して伸び伸びできる)
- ③チームアプローチ(家族、施設職員、計画相談員等)
- ④友人、ボランティア、地域活動等で繋がりのある第三者の参加
- ⑤何でも言える信頼関係、失敗できる環境設定といった配慮

ぱれっとの職員による「福祉用語解説」。第6回は、「意思決定支援」について取り上げます。

⑥成功体験(分かってもらえた、その通りになった)や、失敗体験(思い通りにならなかったけど自分で決めた)の積み重ね

④についてですが、アメリカの社会学者グラノヴェターによると、本人の家族や直接的な支援者(強い紐帯(※ちゅうたい))の関係性の中だけでは意思表出が限定的となり、友人やボランティアなど社会的繋がり(弱い紐帯)からの方が新たな情報がもたらされ、本人の意思表出を促進する可能性が高いとの事。それが本人の身近な人達にも良い影響を与えるとの事です。

## ●津久井やまゆり園事件を経て

2016年に同園の元職員が入所者を殺傷する痛ましい事件が起きました。

「意思疎通ができなければ生きる価値が無い」という極端な考えにより犯行に至ったとの事です。園では【この考え方が「施設で働く事」によって醸成されたという事を私たちは重く受け止めなければならない。重い障がいのある人達だけを集めて、保護・管理的に生存権を保障するという入所施設のあり方が問い直されなければならない】と考えました。その後、同園では全ての入所者に意思決定支援をしています。また、本人が意思表示しやすくなる環境作りとして、学生メンバーと共に「津久井やまゆり園友だちプロジェクト」を行なっています。友だちによる【安心で、対等な、存在が認められて、楽しい】関係が、その人が本当はやりたかった事や嗜好を表出するきっかけになっているとの事です。

今回の学びを通して、日々メンバーと接する中で、彼らの尊厳を尊重できているか改めて気をつけていきたいと思えます。

(おかし屋ぱれっと職員 小柳香)